北朝鮮主体思想の形成と特徴

李　　鎔　哲

はじめに
1．三つの「主体」概念の形成
2．人間中心の世界観
3．人民大衆中心の社会歴史観
4．「首領」中心の指導原則
5．「社会政治生命体」論
結び

はじめに

朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の政治や社会を客観的に理解するためには、何よりもまず北朝鮮の主体思想を理解することが要求される。このことはもちろん、主体思想の掲げる理念通りに北朝鮮の政治が行われ、その社会が動いているということを意味するものではない。主体思想の理想とする国家や社会と北朝鮮の現実とは大きなギャップがありうる。しかしそれにもかかわらず、主体思想は1970年代前後から北朝鮮の党と国家が認める唯一の「指導的指針」であり、それ故に、北朝鮮の政治だけでなく、多くの一般国民の考え方に対しても実際に深い影響を及ぼして来ている。言い換えれば、主体思想は、多かれ少なかれ、北朝鮮の人々の価値判断の基準として働くものであるといえる[1)]。以下においては、まず三つの「主体」の概念に焦点を合わせて思想の形成過程を歴史的に跡付けた後、80年代に発表された金正日の代表的な論文および談話を中心にして主体思想の内容の特徴を検討することにしたい。

1）北朝鮮理解における主体思想の重要性については、北朝鮮社会科学院の主体思想研究所の元所長であったバク・スンドク氏は、韓国キリスト者との対話の場で次のように述べている。「主体思想を正確に理解することはわが共和国に対する正しい見解を持つための先決条件である。その理由は、主体思想がわが人民の確固不動の世界観であり、革命と建設において朝鮮労働党の堅持している唯一の指導理念だからである」。北米キリスト学者編『キリスト教と主体思想』（ソウル、信仰と知性社、1993年）、160頁。

1．三つの「主体」概念の形成

北朝鮮の主体思想は最初から完結した理論体系で始まったわけではない。48年の政府樹立後、北朝鮮が独自の社会主義体制を建設する過程で直面した国内外の問題に対処する中で形成されたのであり、従って時代の政治的状況によりその内容および強調点を異にしてきている。北朝鮮の主体思想は、「主体」の概念の形成と関連して、大きく三つの段階を経てきたといえる[2)]。

まず第一に、50年代中盤から60年代後半までである。この時期において北朝鮮は「主体」という言葉を主に「自主」(self-reliance) という概念で使用する[3)]。つまり、強大国に対する事大主義的な思考やマルクス・レーニン主義に対する教条主義的な解釈を批判し、対外的な自主性を強調するという意味で主体性を主張している。そしてこの時期における主体の強調は、体系的な論理に基づいた政治思想の次元ではなく、当時の政治指導者である金日成により主に政治的宣言の形で提起されている。例えば、金日成は55年12月に行った朝鮮労働党内部のある報告で、次のように思考方式における主体の確立を強調している（この演説は、北朝鮮で歴史上初めて「主体」という言葉が使われ、「主体思想の起源になる報告」[4)]として評価されている)。

> 「わが党の思想事業で主体とは何ですか。我々は何をやっていますか。我々はあるよその国の革命でなく、まさに朝鮮の革命をやっているのです。この朝鮮革命こそわが党の思想事業の主体であります。従って、すべての思想事業を必ず朝鮮革命の利益に服従させなければなりません。我々がソ連共産党の歴史を研究することや、中国革命の歴史を研究することや、マルクス・レーニン主義の一般的原理を研究することは、すべてが我々の革命を正しく遂行するためです。……しかし思想事業で主体が確立されていないが故に、教条主義と形式主義の過ちを犯すことになり、わが革命事業に多くの害を及ぼすことになります」[5)]

2）主体思想の形成については、97年に韓国に亡命した黄長燁氏の証言により、思想の主導者および主体の概念の変化を中心に大きく三つの段階に区分する観点が一般的になった。この点に関しては、黄長燁『俺は歴史の真理を見た』（ソウル、ハンウル出版社、1999年）、156－162頁、375頁参照。また、主体思想の形成を主体の概念の変化と関連し分析した最近の研究としては、ソ・ジェジン『主体思想の形成と変化に関する新しい分析』（ソウル、統一研究院、2001年）を参照されたい。

3）ソ・ジェジン、上掲書、13－45頁

4）小此木政夫・除大粛監修『資料　北朝鮮研究―Ⅰ政治・思想』（東京、慶応義塾大学出版会、1998年）、114頁。

5）金日成「思想事業で教条主義と形式主義を一掃し、主体性を確立するために」『金日成著作集９』（平壌、朝鮮労働党出版社、1980年）。日本語訳については、小此木政夫・除大粛、上掲書、99－100頁を参照されたい。

この時期において金日成が特に思想での主体性を強調することになる政治的な理由については、互いに密接に関連した二つの政治的状況を指摘することができる[6]。一つは、53年３月のスターリン死後、旧ソ連で起きたスターリン批判の動きであり、もう一つは、そうしたソ連の変化に支えられた北朝鮮国内の政治勢力（いわゆるソ連派）の権力への挑戦である。こうした政治的な状況のなかで、金日成は自分の政治的な正統性と指導権を確保するために、イデオロギー闘争という形で、「教条主義」に対する批判とともに思想的自主性を強調することになったといえる。しかしながら、その政治的な契機はいかなるものであれ、この時期における対外的自主という主体の概念は、今日に至るまで一貫して、主体思想の核心的な内容の一つを形成することになる。

50年代中盤に政治宣言の形で行われた自主としての主体性の強調は、50年代後半と60年代の中ソ間の理念紛争（特に62年のソ連の北朝鮮への援助中断）という政治的状況のなかで、さらに体系性を備えた思想の水準に発展していった[7]。前述した55年の思想での主体に続き、56年には経済での自立、57年には政治での自主、62年には国防での自衛が主体性確立の実質的な内容として付け加えるようになる。こうした主体思想の内容は、65年４月に金日成がインドネシアのアリ・アルハム社会科学院で行った演説で、「思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛、これがわが党が一貫して堅持している立場である」[8]と初めて公式に表明された。

初期の主体思想がその内容において質的な変化を表すのは、60年代後半から70年代の始めまで、当時の金日成大学の総長であった黄長燁が人本主義（ヒューマニズム）に基づいた哲学的体系を作ってからである[9]。この時期を主体思想形成の第二段階であるといえる。黄長燁は、階級闘争を前提にした哲学体系としては、「人間が人間らしく生きる社会」を実現しえないという認識のもとに、主体思想を「人間中心の思想」に体系化しようとした。黄長燁は、後に詳述するが、人間の本質的な属性を自主性・創造性・意識性と規定し、「人間の運命の主人は自分である」という命題を設定する。そして、こうした人間中心の世界観の上に、歴史発展の主体は人民大衆であるという社会歴史観を定式化した。この場合、「人民大衆」の概念については、階級的区分を超えて、「正常的な社

6）小此木政夫「北朝鮮における対ソ自主性の萌芽：1953－1955」（『アジア経済』第12巻第２号、1972年７月）、51－53頁参照。

7）ソ・ジェジン、前掲書、27－35頁参照。

8）金日成「朝鮮民主主義人民共和国における社会主義建設と南朝鮮革命について」（『勤労者』通巻270号、1965年４月）。小此木政夫・除大粛監修、前掲書、177頁。

9）黄長燁氏は68年に人間中心の哲学原理を体系化し、70年に金日成に報告したという。黄長燁、前掲書、155－162頁参照。

会的人間の集団」[10]として規定している。この点からすると、人間中心の主体思想は、マルクス・レーニン主義とは区別される新しいパラダイムの思想を目指したものであるともいえる。

金日成は黄長燁が主導した人間中心の哲学体系を受け入れ、70年11月に開かれた第５次党大会で、「朝鮮労働党はマルクス・レーニン主義と、マルクス・レーニン主義を創造的に継承した主体思想を指導の指針とする」と規定する。また、72年12月に改正された憲法（第４条）においては、「朝鮮民主主義人民共和国はマルクス・レーニン主義をわが国の現実に創造的に適用した朝鮮労働党の主体思想を活動の指導的指針とする」とし、主体思想を党と国家の唯一の指導思想として公式に規定する[11]。

人間中心の主体思想の内容は、金日成が72年９月に日本の毎日新聞のインタビューに書面で答えるなかで初めて外部に発表され、ここで主体思想は次のように定義されている。

> 「主体思想とは、一言でいえば、革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設を推進する力も人民大衆にあるという思想です。言い換えれば、自分の運命の主人は自分自身であり、自分の運命を開拓する力も自分にあるという思想です」[12]

金日成はこうした定義のうえ、さらに思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛の内容について具体的に説明している。このように北朝鮮の主体思想は、70年を前後にした思想形成の第二段階で、人間中心の世界観と人民大衆中心の社会歴史観の哲学的基礎を持つ、対外的自主を重視する体系的な思想に発展していくのである。この第二段階で、主体思想の「主体」の概念には、「自主」（self-reliance）という意味とともに、新たに「主人」ないし「主導者」（subjecthood, lord, initiator）の意味が付け加えられるようになる[13]。

さらに主体思想は、70年代の初めから金正日の主導のもとで、「首領」中心の思想体系が形成されつつ、もう一度の質的な変化を経ることになる。この時期を主体思想の第３の形成段階であるといえる。金正日は、大学を卒業した64年から政治活動を始め、74年２月に32歳の年で党中央委員会の政治局委員に選出され、金日成の後継者として正式に決定される。そして、この時期を境にして、権力後継を正当化し、政治的指導権を強化するために、イデオロギー解釈権を

10）黄長燁『個人の生命より貴重な民族の生命』（ソウル、時代精神、1999年）、104頁。
11）大内憲昭『法律から見た北朝鮮社会』（東京、明石書店、1995年）、20頁。
12）金日成「わが党の主体思想と共和国政府の対内外政策のいくつかの問題について」『金日成著作集27』。黄長燁『俺は歴史の真理を見た』、167頁。
13）ソ・ジェジン、前掲書、46頁。

完全に独占し、主体思想を理論的に再構築していく（黄長燁は73年以降「弁証法的唯物論の基本立場を完全に廃棄した人本主義の我流」として批判され、主体思想の体系化作業から除外される[14]）。

金正日による主体思想の再構築（北朝鮮の表現では「全一的体系化」）作業は、主に二つの方向から行われた。一つは、主体思想を「金日成主義」化し、マルクス・レーニン主義に代わる唯一の指導思想として新たに位置付けることである[15]。その結果、74年４月に「党の唯一思想体系確立の十代原則」[16]が提起され、さらに80年10月の第６次党大会では「朝鮮労働党はただ偉大な首領金日成同士の主体思想、革命思想により指導される」と党の規約が変更される。

そして、もう一つの理論的再構築の試みは、既存の人間中心の世界観および人民大衆中心の社会歴史観、そして対外的な自主の諸原理を受け入れつつ、一方、その思想の中で「首領」の政治的指導、すなわち「領導」を絶対化することである。その結果、この時期における主体思想の「主体」の概念には、自主という意味や歴史の主人としての人民大衆という意味の他に、歴史の主人・主導者としての首領という意味が強く含まれるようになる[17]。こうした主体の概念の多面性が、今日に至るまで、主体思想の核心的な内容を形成しているのである。

ところで、金正日は82年に「主体思想について」という論文と86年に「主体思想の教養で提起されるいくつかの問題について」という談話を発表する。これらの論文および談話は70年代に入ってから金正日の行ってきた主体思想再構築作業の代表的な成果であるといえる。以下においては、これらの論文および談話を中心にして、北朝鮮の主体思想の核心的な内容を見ることにする。

２．人間中心の世界観

金正日の82年の論文「主体思想について」は主体思想を総合的で体系的に解説したものである。この論文は北朝鮮では「古典的な文献」として評価され、発表以来、主体思想をめぐる北朝鮮国内の議論の典拠となっている[18]。論文は、

14）金正日の74年の談話「主体哲学理解で提起されるいくつかの問題について」は、黄長燁氏を批判したものとして指摘されている。この点に関しては、ハン・ホソク「黄長燁流の主体哲学解釈に対する北朝鮮内部の批判」、http.//www.onekorea.or、または、ソ・ジェジン、前掲書、59－62頁を参照されたい。

15）小此木政夫・除大粛監修、前掲書、264－265頁。

16）「十代原則」の内容については、上掲書、77－81頁参照。

17）ソ・ジェジン、前掲書、77－81頁参照。

18）例えば、85年に北朝鮮で発行された『主体思想叢書』（全十巻）は、「主体思想について」をその解説の典拠としている。シン・イチョル『北韓主体哲学研究』（ソウル、ナナム出版、1993年）、42頁。

1．主体思想の創始、2．主体思想の哲学的原理、3．主体思想の社会歴史原理、4．主体思想の指導的原則、5．主体思想の歴史的意義という順に構成されている。ここで見られるように、主体思想の実際の内容は、哲学的原理、社会歴史原理、指導的原理という三つの部分でなされている。このなかで哲学的原理は、社会歴史原理と指導的原理を基礎付ける哲学的世界観になる。

主体思想の「哲学的原理」とは、「人間がすべての主人であり、すべてを決定する」という命題に要約される。言い換えれば、「人間を中心にして、世界とそれの変化発展と向かい合う世界観」であるといえる[19]。

主体思想は、このように「人間」と「世界」という2つの哲学的範疇で世界観を展開する理由について、マルクス主義との関係のなかで説明する[20]。主体思想によると、マルクス主義においては、物質と意識、または存在と思惟との関係が「哲学の根本問題」として提起された。つまり、世界の存在論的根源が物質であるか、それとも意識であるかという問題と、意識が物質世界を反映することができるか、言い換えれば世界をどう認識することができるかという問題である。そして、こうした問いに対して答えとして出されたのが、唯物論と弁証法という「哲学の根本問題」である。つまり、前者の世界の根源問題については、物質の一次性・存在の一次性を主張し、後者の世界に対する認識可能性の問題については、物質世界の運動と意識との間の相応性を強調したのである。金正日は、こうした唯物弁証法の哲学的原理が、「観念論と形而上学を打破し、労働階級の科学的な世界観を明らかにした」と歴史的に位置付けている。

しかしながら、主体思想は、マルクス主義が世界の本質の問題を明らかにすることに寄与したのだが、現実的な人間自体を哲学的な考察の中心に置けなかったという点で時代的な限界を持つと捉える。そして、こうしたマルクス主義に対する理解を前提にしつつ、新たに「哲学の根本問題」を提起するのである。

まず主体思想は、唯物論的世界観における「物質」という哲学的範疇を、全体としての「世界」とその世界に存在する「人間」とに区分する。そして、そのうえ、「人間」が「世界」のなかでどのような意味を持つのか、という問題を提起する。こうした「人間と世界との関係」が主体思想の根本問題であり、この問題への解明が主体思想の根本原理、つまり哲学的原理となる。

それでは、主体思想は人間と世界との関係をどのように捉えているのであろうか。前述したように、主体思想は両者の関係を「人間がすべての主人であり、

19）金正日「主体思想について」『親愛する指導者金正日同士の文献集』（平壌、朝鮮労働党出版社、1992年）、小此木政夫・除大粛監修、前掲書、325頁。

20）主体思想の哲学的基礎をマルクス主義との関連で解説したものとしては、ハン・ホソク、前掲論文、または、パク・スンドク「主体思想のいくつかの問題について」『キリスト教と主体思想』（ソウル、信仰と知性社、1993年）が詳しい。

すべてを決定する」と把握する。つまり、「人間が世界と自分の運命の主人」であり、「人間が世界を改造し自分の運命を開拓することに決定的な役割をする」ということである。

それでは、同じ物質でありながら、人間が世界に対して絶対的な地位を持ち、決定的な役割をすることのできる根拠はどこにあるのであろうか。この問題について、主体思想は、人間も同じ物質的存在ではあるが、世界の中でただ人間だけが社会生活を営む「社会的存在」であり、それ故に、人間だけが「自主性と創造性、意識性」を持つようになるからであると説明する。

そして、自主性については、「世界と自分の運命の主人として自主的に生き、発展しようとする社会的人間の属性」と定義し、創造性については、「目的意識的に世界を改造し自分の運命を開拓していく社会的人間の属性」と定義している。さらに意識性については、「世界と自分自身を捉え変化させるためのすべての活動を規制する社会的人間の属性」としつつ、特に「意識性により社会的存在である人間の自主性、創造性が担保され、その合目的的な認識活動、実践活動が保障される」と強調している。人間が世界において、そして世界に対して主人でありうるのは、人間だけがこのような自主性、創造性、意識性を社会的関係の中で「本質的特性」として持っているからである[21]。

以上が主体思想の哲学的原理の核心的内容である。要するに、主体思想は人間の能動的役割を中心にして世界を捉えようとするものであるといえる。それ故に、マルクス主義の唯物論的世界観を前提にしつつも、一方、自主性・創造性・意識性という精神的要素を人間の本質的特性として規定し、その上に「人間がすべての主人であり、すべてを決定する」という根本原理を設定するのである。この意味で、主体思想の哲学的原理（世界観および人間観）は運動論的な性格を強く帯びるものであるといえよう[22]。

3．人民大衆中心の社会歴史観

主体思想の社会歴史原理（「主体史観」）は前項の哲学的原理を論理的基礎として、歴史の主体、歴史の性格、そして歴史の推進力の問題を論じている。その内容の核心は、「歴史の主体は人民大衆であり、社会歴史運動は人民大衆の自主的、創造的運動であり、革命闘争で人民大衆の自主的な思想意識が決定的な役割をする」という命題で提示される。そして、こうした主張もマルクス主義の史的唯物論（唯物史観）との関係の中で行われる。

21）同上。

22）鐸木昌之「北朝鮮における主体思想の新展開―『社会政治的生命体』論を中心に―」（東京、『法学研究』第63巻第２号、1990年２月）、240頁。

主体思想によると、前項で見たように、マルクス主義は世界の根源問題について物質の意識に対する一次性を主張した。そして、こうした世界に対する見解から、「社会的意識」（social consciousness：事物に対する社会的見解・観念・イデオロギー・心理を含む精神的生活の総体）は「社会的存在」（social being：社会生活で形成される物質・経済的関係の総体）を反映するという史的唯物論の基本命題を設定した。さらに、社会構成体論における経済的土台（物質的生産と経済的関係）と上部構造（法的・政治的・イデオロギー的秩序）との関係については、土台の上部構造に対する決定論を主張した。マルクス主義はこうした立場から経済的土台を中心にした社会歴史の発展法則を定式化したのである。主体思想は、こうした唯物論的歴史観について、「社会も自然のように物質世界に属し、物質世界の発展の一般的な合目的性により変化発展するということを明らかにすることにより、社会歴史に対する観念論的見解を打破した」[23]と評価している。

しかし一方、主体思想はマルクス主義の唯物史観の歴史的意義を是認しつつも、それが自然史と社会歴史の質的な差異、つまり自然史と区別される社会歴史の本質的な特性を過小評価したと批判する。その本質的特性とは、「自然の運動には主体がないが社会的運動には主体がある」という点である。つまり、「自然の運動は客観的に存在する物質の相互作用により自然発生的に行われるが、社会的運動は主体の能動的な作用と役割により発生し発展する」[24]ということである。従って、主体思想によると、社会の本質や歴史の変化は人間を中心において捉えなければならないのである。

こうした人間中心の観点から、さらに主体思想は四つの社会歴史原理を主張する。その原理は、(1)人民大衆は社会歴史の主体である、(2)人類歴史は人民大衆の自主性のための闘争の歴史である、(3)社会歴史運動は人民大衆の創造的運動である、(4)革命闘争で決定的な役割を果たすのは人民大衆の自主的な思想意識である、という命題で提示される。

これらの命題の中で、(1)の原理は、人間社会のなかで人民大衆を歴史の主体として設定したものであり、(2)と(3)の原理は、人民大衆の自主的で創造的な運動により、人間の本質的な特徴とされる自主性と創造性が実現する過程を歴史発展として規定したものである。そして、(4)の原理は歴史発展における最も重要な推進力を人民大衆の自主的な思想意識に置くものである。歴史における思想意識の役割を強調するという点で、主体思想の社会歴史原理は主意主義的な性格を強く持っているといえる[25]。

23）ハン・ホソク、前掲論文、12－15頁参照。
24）金正日、前掲論文、小此木政夫・除大粛監修、前掲書、327頁。

4．首領中心の指導原則

ところで、主体思想の理解において特に注目すべき点は、(1)の歴史の主体の問題と、(4)の歴史の推進力の問題である。まず前者の問題において、主体思想は社会運動および歴史発展を担当する主体を人民大衆に置き、「世界を認識し改造する人民大衆の知恵と力には限界がない」という点を指摘している。しかし同時に、人民大衆の主体的力量の発揮は、必ず労働階級と党、そして首領の「正しい指導によってのみ」[26]可能であるという点を強調する。このような人民大衆－労働階級－党－首領へと繋がれる「指導と大衆との結合」の重要性は次のように強調されている。

> 「労働階級の党は革命の参謀であり、労働階級の首領は革命の最高指導者です。人民大衆がどのように革命的に意識化され組織化されるのか、どのように自分の革命任務と歴史的使命を遂行するのかは、党と首領の正しい指導を受けるかどうかに掛かっています」[27]

このような指導と大衆の結合の論理は、正しい政治指導者があってこそ人民が社会と歴史の主体でありうるということであり、この論理は事実上歴史の主体を人民大衆から政治指導者に移行させるものであるともいえる[28]。

また、歴史発展の推進力の問題においても、主体思想は人民大衆の自主的な思想意識を力説しつつ、一方、首領と党による「思想改造事業」を他のいかなる事業よりも先行させるべきであると主張する。その思想改造事業とは、人民大衆を「真の共産主義的人間」、つまり「自主的で創造的な人間」へと変えることであるのだが、そのためには「主体の革命観を立てること」が重要であり、さらに主体の革命観で最も重要なことが「党と首領に対する忠実性」であると強調する。このことは次のように述べられている。

> 「主体の革命観で核をなすものは党と首領に対する忠実性である。社会主義、共産主義の偉業は首領により開拓され、党と首領の領導のもとで遂行されます。革命運動はただ党と首領の領導を奉る時にのみ勝利することができます。従って、革命観を正しく立てるためには、常に党と首領に対する忠実性を高めることを基本にしなければなりません」[29]

25）主体思想の主意主義的な性格は、90年代に入り東欧やソ連の社会主義体制の崩壊という時代状況の中で、「思想意識がすべてを決定する」という論理で、より強く現れる。

26）金正日、前掲論文、小此木政夫・除大粛監修、前掲書、329頁。

27）上掲書、330頁。

28）上掲書、340頁参照。

29）金正日、前掲論文。

こうした論理も、党と首領に対する無条件の忠誠心があってこそ人民が自主的な思想意識を持つことができるということであり、この点からすると、事実上歴史発展の推進力の根源を党と首領の意思に置くものであるといえる[30]。

主体思想でいう指導的原則とは、こうした首領中心の指導方法の具体的な方向を提示したものである。その内容は、(1)自主的立場を堅持すべきである、(2)創造的な方法を具現すべきである、(3)思想を基本に置くべきである、という三つの命題になっている。

まず、(1)の自主的な立場を堅持するという指導原則においては、65年に金日成により初めて公式に表明された、思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自立の原則が強調されている。また、(2)の創造的な方法を具現するという指導原則においては、「人民大衆に依拠する方法」と「実情に合わせる方法」が強調される。ここでは主に、官僚主義や教条主義的な態度が克服の対象として批判される。これらの指導原則は、主体思想形成の初期段階における自主（self-reliance）としての主体の概念を体系的に理論化したものであるといえる。

以上、金正日の82年の論文「主体思想について」を中心にして、主体思想の構成および内容について見てきた。この時期における主体思想の内容の特徴については、人民大衆の自主性および創造性とともに、党と首領の政治的指導の絶対性が強調されているという点を指摘することができる。この「指導と大衆との結合」の論理は、金正日の86年の談話文である「主体思想教養で提起される問題について」（以下、86年談話と略称する）において「社会政治的生命体」という新しい概念で理論的に体系化されることになる。

5.「社会政治的生命体」論

金正日の86年談話は、当時ソ連および中国で展開された改革開放路線の影響を受けたものである。特に、85年のゴルバチョフ大統領の執権後、ソ連で展開されたペレストロイカは北朝鮮政権の指導部に大きな衝撃と危機感をもたらした。こうした時代的状況の中で、北朝鮮の人民と党の思想的結束を強化し、体制を維持するために発表されたものが86年談話であり、その中の「社会政治的生命体」論であるといえる[31]。

30）このような論理転換の過程に関する分析としては、鐸木昌之『北朝鮮―社会主義と伝統の共鳴―』（東京、東京大学出版会、1992年）を参照されたい。

31）社会政治的生命体論が86年に強調された理由および目的については、鐸木昌之、前掲論文、247－254頁、または、前掲書、142－156頁が詳しい分析を行っている。ここでは、ソ連および中国の改革に対する警戒の他に、資本主義に対する社会主義の優越性の主張、韓国に対する政治的正統性の確保などを主な理由として指摘している。

社会政治的生命体とは、「首領、党、大衆が一つの生命として結合し、運命を共にする生命体」[32]として捉えることができる。この生命体が歴史の主体であり、人民大衆はこの生命体のなかで生きる時にのみ、人間の本質である自主性・創造性・意識性を具現することができ、さらに永遠の生命、つまり社会政治的生命を得ることができるということが社会政治的生命体論の主な内容である。金正日は次のように述べている。

> 「革命の主体は首領と党と大衆の統一体です。人民大衆は党の領導のもとで首領を中心に組織思想的に結束することにより、永生する自主的な生命力を持つ一つの社会政治的生命体になるのです。個別的な人間の肉体的生命は終わりがあるが、社会政治的生命体で結束された人民大衆の生命は永遠であります」[33]

社会政治的生命体論は、社会政治集団を一つの生物学的な存在として捉えているという点で、一種の社会有機体論であるといえる[34]。人民大衆は「生命体」それ自体であり、党は人民大衆の核心部として社会政治的生命体の「中枢」である、と捉えられる。そして首領は、「人民大衆の自主的な要求と利害関係を総合・分析し、一つに統一する中心であると同時に、それを実現させるために人民大衆の創造的活動を統一的に指揮する中心」であり、それ故に社会政治的生命体の「最高脳髄」[35]として定義される。この場合、首領は人民と党と首領との三者の中で最も重要であり、最も決定的な役割をするものとして位置付けられる。その理由として、「個別的な人間の生命の中心が脳髄であるように、社会政治的生命の中心はこの集団の最高脳髄である首領である」という有機体論の観点が強調される。

また、社会政治的生命体の内部の社会関係においては、自由と平等の原理に基づいた権利と義務の関係でなく、「互いに助け合い、愛する革命的義理と同志愛の関係」[36]が強調される。さらに、この革命的義理と同志愛は、個別的な人間を社会政治的生命体に結合させ、社会集団の統一性と自主性を守るものであり、この意味で、自由や平等の原理に勝るものであると主張される。そして、この場合においても、革命的義理と同志愛は首領を中心に行われ、「首領に対する忠実性と同志愛は絶対的で無条件的なもの」になるべきであると強調される。こ

32）鐸木昌之、上掲論文、240頁。
33）金正日「主体思想教養で提起されるいくつかの問題について」『親愛する指導者金正日同志の文献集』（平壌、朝鮮労働党出版社、1992年）、340頁。小此木政夫・徐大粛監修、前掲書、365頁。
34）鐸木昌之、前掲論文、242－244頁と、前掲書、135－138頁。黄長燁、前掲書、386頁参照。
35）金正日、前掲書、340頁。小此木政夫・除大粛監修、前掲書、365頁。
36）同上。

の点からすると、社会政治的生命体において指導と大衆との結合の論理は、目的意識的に形成される社会政治的関係でなく、血縁で結合される生物学的な有機体や血縁共同体の関係のなかで新たに設定されているといえる。

さらに、社会政治的生命体論は政治思想的性格を越える類似宗教的な性格を帯びている[37]。その擬似宗教性の根拠としては、「永生」、つまり永遠な生命に関する主張と、永生を保障する首領の絶対性に関する主張を挙げることができる。

まず永生の問題について、社会政治的生命体論は人間には二つの生命があると主張する。一つは両親から受けた肉体的な生命であるが、これは死と同時に消え失せる。そして、もう一つは社会政治的生命体の中で得られる社会政治的生命であるが、これは永遠に存在するものとされる。従って、個人は、首領と党と人民が一つに結ばれた社会政治的生命体の成員になることにより、永遠不滅の生命を得ることになるのである。こうした永生の論理は、それなりに人間の生と死の問題を取り扱いつつ、個人に存在の意味を与えているという点で、宗教性を強く帯びるものであるといえよう[38]。

また、社会政治的生命体の中で永遠の生命を与えるという首領の絶対性に関する主張も、救援者としての神の概念に類似したものである。社会政治的生命体における首領は、生命体の創始者であり、また永遠不滅の生命活動を統一的に指揮する中心として位置付けられる。従って、個人は首領の指導に絶対的に従う時にのみ、永遠な政治的生命、つまり永生の世界へ救われるのである。こうした絶対者・救援者としての首領の存在をめぐる主張も、社会政治的生命体論に類似宗教性を与えるものであるといえる[39]。

結び

以上、三つの「主体」の概念を中心にして主体思想の形成過程を歴史的に跡付け、さらに80年代に金正日の名義で体系化された主体思想の内容の構成および特徴について見てきた。北朝鮮は、90年代に入り、東欧や旧ソ連の社会主義体制が崩壊するという時代的な状況のなかで、新たに「我々式社会主義」や「強性大国」論を主張することになる。しかしながら、これらの主張も本質的に80年代における主体思想の内容を大きく逸脱するものではないと思われる。切迫した体制危機のなかで、既存の主体思想の内容、そのなかでも特に50年代に打

37）鐸木昌之、前掲論文、246頁参照。また、主体思想の擬似宗教性に関する最近の詳しい分析は、キン・ビョンロ『北韓社会の宗教性：主体思想とキリスト教の宗教様式比較』（ソウル、統一研究院、2000年）を参照されたい。

38）キン・ビョンロ、上掲書、75頁参照。

39）鐸木昌之、上掲論文、246頁と、キン・ビョンロ、上掲書、63－70頁参照。

ち出された対外的な「自主」としての主体の概念をより民族主義的に強調したものと考えられる。こうした脈絡からみると、主体思想の理解は、今後の北朝鮮の政治的な態度を捉えるにおいても欠かせないものであるといえよう。